

歸
去
來

夕方までかすかにあつた風は、八時を過ぎるとぴたりとやんだ。それに呼応したかのように湿度だけがただただあがっている。空気にはこれ以上はないというくらい水分が充満し、いざれ土砂降りの雨がくる予感をはらんでいた。

だが今は、じつとしていただけでもふきでる汗をぬぐい、待ちつづける他はない。

不思議だ、と志麻由子は思った。これほど湿度が高いなら、汗など意味がないのに。発汗は気化することで体温を下げる調節機能だ。だがこんなに湿度が多いと、汗は蒸発せずただ滴るだけだ。体温を下げる役目をまるで果たさず、シャツをべたつかせてより不快さを増す以外の効果は何もない。

それでもまだ、自分がいるのが土と緑のある公園なだけ、ましといえる。今夜、都内に散った特別捜査班の他のチームは、昼の熱をたつぷり吸いこんだコンクリートのジャングルで車の排気管やエアコンディショナーの室外機から吐きだされる熱風に炙られ、喘いでいることだろう。

周囲にビル群がそびえているとはいえ、この公園には車もエアコンディショナーの室外機もない。おそらく二、三度は気温が低い筈だ。

ただかわりに――。

耳もとで唸りをたてる蚊を思わず振り払った。この蚊の多さだけはたまらない。年々自然が失われ、野生の生きものが減っているというのに、なぜこの都会のどまん中に、こうも虫が生息しているのだ。先週もこの公園で張りこみをしていた由子は、足もとを動くカブト虫のような生きものを見つけ、それが巨大なゴキブリだとわかって思わず悲鳴をあげかけた。ゴキブリにはあまりに大きく、そしてそのせいなのか、らしくないのろのろとした動きだった。

喉の奥で押し殺した筈の悲鳴だが、公園内に張りこむ同僚のイヤフォンには、手首につけたピンマイクを通して流れこんでいた。

「どうした」

右耳にさしこんだイヤフォンから山上やまがみの声が流れた。

「すみません、なんでもありません」

由子はいった。

「ゴキブリだろ」

ベンチで隣にすわる中井なかいがいった。左手を口もとにもっていく。

「えー、ただ今、巨大ゴキブリが志麻なま巡查部長の足もとを通過しました。以外、異状なし」

イヤフォンにいつせいにくすくす笑いが流れこんだ。

「確かにでけえな、こいつ」

中井がいつて、ようやく由子の爪先から二十センチほどのところを遠ざかりつつあるゴキブリを眺めた。

「潰すとかやめてよ」

由子がいうと、中井はふりかえり、首をふった。

「しないよ。反撃されたら大変だ。あいつら顔に向かって飛んでくるんだぜ。俺も嫌いなんだ」

もともと青白い顔が、夜目にも白っぽく見えたのは、暑さで参りかけていたからかもしれない。

先週の張りこみのあと、体調不良を訴え、班長の津本は中井を今夜は外していた。その結果、

先週はカッパルを装っての張りこみが、今週は由子ひとりになった。

女がひとり、夜、公園のベンチにいる姿は、冷静に考えたら奇妙な凶だろう。幸いにこの公園には酔っぱらいや浮浪者があまり現われないので、もし由子に近寄る者がいるとすれば、それは犯人である確率が高く、連続殺人犯で尚かつ二十年前の事件の模倣犯である犯人には、由子が**囷おとり**の女刑事だと見抜けるほどの冷静さはないだろう、と行動心理分析官は判断したのだ。模倣犯はある種の強迫観念にとらわれて犯行に至るため、今やらなければとるかえしのつかないことになる、という衝動につきうごかされている。結果、被害者にふさわしい人物が、ふさわしい状況にいても、それが警察による畏だと気づかない。

右手の空が光った。黒々とした空にそそりたつ高層ビルのすぐ上に稲光が走ったのだ。

雷鳴はない。が、夕立の来襲は刻々と近づきつつある。

いっそ降ってくれればいい、と願ひ、それでは今夜が無駄になる、と由子は思い直した。

二十年前の七月九日、この公園で、「ナイトハンター」は初の犯行に及んだ。被害者は近くのビルに勤務先がある二十二歳の女性会社員だった。同僚との飲み会のあと、帰宅したと思われていたのが、公園のベンチの陰に倒れて死亡しているのが翌朝、発見された。

死因は絞殺だった。肋骨などの骨折状況から、犯人は被害者を仰向けにして馬乗りになり、両手で喉を絞めて殺害したと判明した。

六日後、同様の犯行手段で女子高校生が殺害された。場所は人通りの少なくない原宿の商店街だった。ブティックの入ったビルとビルのすきまにすわりこんでいる制服姿の少女の前を、人々は死体とは気づかずいきかっていたのだ。

「ナイトハンター」を名乗る犯人の犯行声明がテレビ局の女子アナウンサーあてに届いた。

声明には、これからも「狩り」をつづけていくと記されていた。動機には触れておらず、ただ「狩りは、たのしい。たのしい時間は永遠につづく」と印刷された文字が並んでいた。

一週間後、特別警戒にあたっていた警察官が深夜の青山通りを無灯火で走る自転車に乗った若者を職務質問した。若者は制止する警官をふり切り、逃走した。遺留品のリュックの中に小型のワードプロセッサがあり、書体が犯行声明と一致したことから、警察は静かに捜査の輪を絞り始めた。

一ヵ月後、江戸川区の河川敷で、ジョギング中の主婦が絞殺され、これが「ナイトハンター」の最後の事件になった。警察は目撃者の話などから近くに住む十六歳の少年を容疑者として特定した。未成年者であるため、慎重に裏づけ捜査をおこない、任意同行を求める直前までいったとき少年は首吊り自殺した。遺書らしきメモにはただ一行、

「ナイトハンターは、ぼくです」

と書かれていた。

動機はいつさえい説明されず、少年の環境にも連続殺人と結びつく要素はなく、はたして本当の

「ナイトハンター」だったのかという疑問は長いあいだ残った。が、現実にはその後、通り魔による絞殺事件は発生せず、十六歳のこの少年が「ナイトハンター」だったのだと、マスコミも結論づけざるをえなくなった。

それから十年後、今から十年前に、再び連続絞殺事件が発生した。現場は渋谷区と荒川区だった。被害者はいずれも女性で、帰宅途中の飲食店従業員を狙ったものだった。凶器には金属製の鎖らしき品が使われ、犯行声明はなかった。

由子の父は、当時、警視庁刑事部捜査一課の刑事だった。

あの夜のことにはつきり覚えている。夕方一度帰宅して、母と由子の三人で食事をした父は、携帯電話の呼びだしをうけ、外出した。それが午後八時過ぎだった。

城東署の管内に、結城ゆづきというチンピラがいた。どこかの組に属するわけでもなく、デートクラブの運転手や改造ロムパチンコ台の打ち子をやったり、闇金融の取り立ての使い走りをしていた。結城は、以前恐喝で父に逮捕されたことがあり、それが縁でなついていたと、後に父の同僚から聞かされた。

父を呼び出したのはその結城だった。荒川区で絞殺されたスナックホステスは自分の知り合いで、殺される二日前、そのホステスを車で自宅まで送った際に、見慣れない男がいたと父に知らせてきたのだ。

結城の目的は小遣い稼ぎだったが、作り話ではないようだと判断した父は、結城の話をもとにその男の人台じんたいを捜査本部に報告し、帰宅した。

十一時過ぎだった。受験勉強をしていた由子の部屋を父が訪れた。父がそんなことをするのは

初めてで、由子は驚いた。

「由子、いいか」

中学三年くらいから、父とは話す機会が減っていた。反発めいたものがさほどあったわけではないが、父親という存在がわずらわしく、また警察官というその職業にも馴染めないものを感じていた。だが父は特に厳格というわけでもなかったし、母や自分に頭ごなしで何かを命じることもしなかった。

何となく、父と話さない、目を合わさない、という状態にあっただけだ。

二十八歳になった今ならわかる。それはただの「時期」だっただけだ。過ぎれば、昔のように父と話したり笑ったりできた。

なぜならひとりっ子の由子は、父のことが本当は好きだったからだ。

「正せいぎのみかた」と題した、父の制服姿のクレヨン画は、由子が小学一年生のときに描いたものだ。

それが殉職後、署の父の机からでてきた。父の宝だった、と部下の課員に教えられた。

父が話したかったのは進路だった。

「大学、どこ受けるんだ」

「受かるところ」

「受かって、卒業したらどうする」

「何にも考えてないよ。でも警察には入んない」

由子がいようと、父は苦笑いを浮かべた。

「そうか」

「それを知りたかったの？」

つきはなすように由子は訊ねた。父は一瞬黙り、

「いや、そういうわけじゃない」

とだけ答えた。

「それだけ？」

「お前が何か考えてる職業があるのなら、聞きたいと思ったんだ」

「ない」

怒られるか、と思った。なんだ、十八にもなってそんなことも考えていないのか、と。

だが父は怒らなかつた。

「わかつた、また話そう」

とだけいって、部屋をでていった。

それから一時間後、再び携帯が鳴り、応こたえた父は、母に、

「でかける」

と告げて外出した。

その後のことは、当時の部下から聞いた。

かけてきたのは結城だった。駅前のゲームセンターにいたところ、問題の男を見た、と知らせてきたのだ。

男はひとりで何かを物色するように階段に腰かけていたという。

父は二名の部下を呼びだした。いわゆる「ヤサづけ」をするのが狙いだった。男を尾行し、住居か馴染みの店をつきとめ、その正体を割る。

だが呼びだされた部下のうちひとり、子供が高熱を発し、車で病院に連れていく途中で、すぐには駆けつけられない状況だった。もうひとは、翌日が非番のため、地方の実家に帰る電車の車中にいた。

他の刑事課員に連絡しなかったのは、その二名以外は別件の捜査に駆りだされていたためだった。一週間前に管内で発生した強盗事件の捜査本部に組みこまれていたのだ。

父はひとりで駅前に向かった。結城から男を教えられ、そして尾行を始め、連絡が絶えた。

翌日、荒川に浮かんでいる父が発見された。死因は絞殺だった。

結城は、父とは駅前で別れたきりだといひ、そのアライバイは違法深夜営業の麻雀荘で確認された。

報告のあった人台をもとに捜査本部は、結城が見た謎の男を追った。

人台は、二十代、長髪で、黒の革パンツに銀色のチェーンを巻いた優男風、やまおとこというものだった。

2

男は発見されず、鎖を使った絞殺事件も二件で止まった。

十年の間に由子は大学を卒業し、「入んない」と父に宣言していた警察に就職した。

本庁捜査一課に配属されたのは今年のことだ。由子をひっぱったのは、やまわか一、の山岡理事官だっ

た。父と警察学校の同期生だ。

「捜一にはもつと女が必要だ」というのが、山岡の考え方だった。一課長や刑事部長にかけあい、三人の女性刑事を捜査一課へと引いた。

だが「強行犯」に組みこまれたのは由子だけだ。あとの二名は「継続捜査」と「ハイテク犯罪捜査」に配属された。

由子だけが強行犯に配属されたのは、その足の速さを買われたからだ、と聞かされた。中学、高校と陸上部の短距離走者で、インターハイにもでていた。

山岡は、十年前に父を殺した犯人を警察がアゲられないでいるのを気にしていた。継続捜査係では、父を絞殺した犯人の行方を追っている。

警察官になって六年、刑事になってからでも三年がたつ由子にはわかる。十年間の捜査で被疑者を逮捕できなかった犯罪が解決される見込みはほとんどない。

もし解決される可能性があるとすれば、犯人が同じような犯罪で逮捕され、余罪を追及され白した場合のみだ。現場で遺留指紋やDNA検体などが採取されていれば、別件で逮捕された被疑者と一致し、急転直下の解決、という幸運もあるだろう。だが十年前の事件では、犯人の特定につながる遺留物は何もなかった。

六月二十八日、文京区で帰宅途中の女性会社員が絞殺された。深夜で人通りの少ない時間帯、場所だった。馬乗りになり、首を絞めて殺害するという手段が、二十年前の「ナイトハンター」と一致した。

七月五日、原宿で女子中学生が絞殺され、犯行声明が被害者の携帯電話を使って携帯電話サイトに送られた。

「帰ってきました。ナイトハンター」

マスコミは色めきたった。二十年前に自殺した少年は真犯人ではなく、警察の内偵に追いつめられたのが自殺の原因だという評論家まで現われた。

だが二十年前も捜査一課にいた山岡は、「竹河は本ぼしだ」といいきっている。

たけがはぼしだが二十年前も捜査一課にいた山岡は、「竹河は本ぼしだ」といいきっている。
たけがはぼし竹河隼人というのが、自殺した少年の名だった。当時は「少年A」として、本名がマスコミに流れなかった。

二十年前、十六歳といえば、今は三十六だ。

竹河の同級生や近所の住民は、警察が内偵を進めていたことを忘れてはいないのだった。

竹河の遺族は母親だけだったが転居をくり返し、所在をつかむことすら難しくなっていた。

警察は、文京区と原宿での殺人を、「ナイトハンター」の模倣犯による犯行と断定した。「ナイトハンター」は二十年前に死亡し、すでに書類送検されている。したがって模倣犯以外ありえない。

特別捜査本部が設置され、そこに由子も組みこまれた。特捜本部の方針はおおまかに分けてふたつ、ひとつはすでに起こった殺人の地取り、鑑取りをもとにした被疑者特定である。

もうひとつが、模倣犯であることを踏まえ、過去に発生した「ナイトハンター」、あるいは類似した通り魔絞殺事件の犯行現場を張りこむ、というものだ。

今、由子がいる公園、江戸川区の河川敷、そして父の死につながった渋谷区と荒川区の二件の

「チェーン殺人」の現場に張りこみ班が配置された。

事件は、土、日曜の週末に起こっていて、それも二十年前の「ナイトハンター」を模倣していた。したがって過去の犯行現場を週末に張りこむというのは、効果的であるように思われた。

由子が渋谷と荒川の犯行現場の張りこみ班に入れられなかったのは、山岡の配慮だ。解明されたわけではないが、父親の事件との関連が濃厚だったからだ。

吸った汗で重くなったミニタオルで由子は首すじをぬぐった。

十年前の「チェーン殺人」と「ナイトハンター模倣犯」のあいだには何らかの関連があるだろうか。

「チェーン殺人」は凶器を用い、十年前の「ナイトハンター」は素手だ。まず殺害手段がちがう。

二十年前とは異なり、現在は皮膚からでも指紋採取が可能になっている。竹河隼人の指紋が二十年前、被害者から採取されていたら、「えん罪説」は生まれなかったろう。

警察の現場にいる者として、由子は竹河が本ぼしであるという、山岡の説を信じたかった。

模倣犯は、素手では犯行に及んでいない。といって分厚い手袋を使っているわけでもなかった。薄手の、防菌などに使われるような樹脂製の手袋をはめているようだ。快樂殺人に分類されるこうした連続殺人犯は、銃よりは刃物、刃物よりは鈍器、鈍器よりは素手と、より直接的な殺害方法を好む。

被害者の死と自身の距離を近づけたい、という願望があるからだという。

ライフルなどによる遠距離からの狙撃を楽しむような連続殺人犯が少ないことも、この説を裏

付けている。

だが絞殺は失敗の可能性が高い殺害方法だ。被害者の抵抗にあり、犯人が怪我をしたり、騒ぎで周囲の人間に気づかれやすい。

連続通り魔事件では、犯行件数の中に失敗、つまり未遂がかなりの数で含まれている。犯行に及びかけたところで被害者に察知され、逃げられたり、騒がれたのであきらめた、といったものだ。

しかし「未遂」に終わった絞殺魔の報告はこれまでのところ、ない。それは二十年前の「ナイトハンター」、十年前の「チェーン殺人」でも同様で、共通点と考えることができる。

イヤフォンが鳴った。

「今、公園入口を男性一名が通過。グレイのスーツ、ネクタイ。から手だ」

班長の津本の声だった。

再び稲光が走った。今度は低い雷鳴も伴っていた。由子は首を曲げ、顎を胸にひきつけた。そうすると眠っているかのように見える。

「三班、スーツを確認。一班方向へ移動中」

由子は左手を口もとによせた。

「一班、了解」

一班は由子ひとりだ。緊張はない。張りこみのあいだ、公園に人が入ってくるたびに、こうして眠りこんだふりをしている。

うなじに冷たいものを感じ、一瞬どきりとした。それが雨粒であると、すぐにわかったのは、

手や頭にもぼつぼつと大粒の水滴があたり始めたからだった。

ついに降り始めた。由子はそつと息を吐いた。

「こちら二班、視認できません」

山上の声が耳で響いた。妙だ。公園の入口からこのベンチがおかれた中心部まではほぼ一本道だ。由子の同僚たちが潜む植えこみにでも入らない限り、三班に見られたら次は二班の目の届くところを通る筈だ。

ポツポツ、ポツポツ、という音が大きくなった。雨足が急速に速まっている。まずい、雨は一気に激しくなりそうだ。

あたりが不意に明るくなった。同時にこれまでとは比べものにならないほどの大ききで雷鳴が轟き、由子はびくつとした。

「まずいな」

津本の声にガリガリという雑音がかぶった。

これで眠っているふりをするのは不自然だ。

由子は顔をあげた。いきなり雨が土砂降りになった。視界が白くかすむ。

閃光が走る。頭上をカラカラという音が駆け抜け、そして体が浮くような轟音があたりを揺るがした。

雨粒が弾けていた。白く太い糸が天から地につき刺さり、跳ねかえっている。土の表面がみるみる黒く染まり、あつという間に水たまりができた。表面が沸騰する。

「つしゅうしますか」

山上の聲が雨音にかき消されかけている。由子は左手を口もとにもっていき、右手でイヤフォンの入った右耳をおさえた。

「一班です、どうしますか。撤収ですか」

そのとき、何かが頭上をよぎった。

喉に巻きつき、恐しい勢いで食いこむ。叫びを発する暇もなかった。背中がのび、仰向けにのけぞるように由子はベンチに体を押しつけた。

喉に巻きついたものは容赦なく絞りこまれ、大きく開いた口は息を吸うことも吐くこともかわない。

雨音すらかき消す轟音が耳の奥で鳴っていた。手を喉にやった。巻きついたものに指は届かない。それほど深く巻きついている。

上着を脱いでいたので、拳銃は足首に留めてある。だがそこに手をのばすのは不可能だった。体を折れば、さらに喉は絞めつけられる。

視界の両端が黒ずんだ。

一瞬、喉を絞っていた輪がゆるんだ。由子は必死に息を吸いこんだ。ひゅうつという音が首の中を通過する。

「びっくりしたか」

耳もとでしわがれ声がして、次の瞬間、再び喉に輪がくいこんだ。両足が勝手に跳ね、泥水をとばす。

こいつは楽しんでる。

そう気づいた瞬間、とてつもない恐怖がこみあげた。

この豪雨の中、植えこみの中を移動し、ベンチにひとりですわる「獲物」の背後に立つと、すばやく喉を絞めあげた。

素手じゃない。喉にくいこんでいるのは、明らかに固い感触のある輪だ。

一気に絞めあげ、失神する直前で輪をゆるめたのは、このまま殺したのではつまらないと思ったからだ。

「知らないのか、ナイトハンターが帰ってきたのを」

耳もとで声はつづいた。輪は、声はだせないが完全に息が止まらないほどの深さで喉にくいこんでいる。どれだけ絞めれば死に至るのかを熟知しているのだ。

手は銃に届かない。

由子はけんめいにもがいた。イヤフォンが飛んだ。

「いいねえ。暴れるんだ。うんと暴れてよ」

声は落ちついていてる。この場を支配しているという余裕があるのだ。それがさらに恐怖をかきたてる。

落ちつくんだ、落ちつかなければ。

瞬きまばたした。うしろから絞められているせいで、上体は大きくのけぞっている。顔は真上を向いているせいで、雨が顔を激しく叩き、目がかすんだ。雨にまじり、あたたかいものが目尻を伝う。

涙が自然にこぼれていた。

「そろそろ終わりにしようか」

由子は必死に体を下にずらした。ベンチの背ごしに絞めている輪が、わずかだが上にずれる。それにあわせて男の体がのびあがり、由子の顔の上に来た。

顔にあたる雨が止まった。男の頭が雨をさえぎっているのだ。

暗闇に男の顔の輪郭が浮かぶ。

「さようなら」

男がいつて、輪を絞めあげた。その瞬間、あたりがまっ白く光った。男の顔が見えたと思った瞬間、視界が暗転し、すべてが闇に沈んだ。

3

びくん、と体が跳ねた。自分でもコントロールできない、筋肉の痙攣けいれんだった。つづいて、まるでファイゴのような音をたてて、喉が息を吸いこむ。

頭が痛い。割れそうに痛む。苦しい。誰か、助けて。お母さん、お父さん。

はっと体を起こした。

「けいし」

目の前に制服姿の男が立ち、目をみひらいていた。

「里貴さとき」

かすれた声でた。男は半年前に別れた里貴だった。二歳下の、大学の後輩。大学をでて三年後に再会し、つきあい始めた。だが半年前、里貴はつとめる会社の転勤で上海シンハイに旅だった。

いっしょにきてほしい、という言葉に由子は首をふった。遠距離恋愛は嫌だ、が里貴のいいぶんだった。

結婚？ そんな気はまだ自分はない。一課に配属されたばかりなのに。父を殺した犯人を知る手がかりが何もないのに。

やっぱり由子さんはお父さんを殺した犯人をつかまえないんだ。

殺人犯は誰だってつかまえないわ。

それだけじゃないでしょう。警察に入ったのだから、お父さんを殺した奴をつかまえたかったからじゃないの。

全部よ。殺人犯は全部つかまえない。その中に、お父さんを殺した奴も入ってる。

「里貴。何してるの」

いってから、自分が知らない場所にいることに由子は気づいた。

オフィスはオフィスだ。殺風景な色の壁に丸い時計がかかっている。木でできた棚があり、黒っぽく厚い本が並んでいた。背表紙には「刑法」「警察法」といった文字がある。

目の前は大きなデスクだった。厚紙の表紙をつけ、黒いより糸でとじられた書類が何冊も積みあげられている。ボタンのとびでた古めかしい形の電話器がそのかたわらにある。

「大丈夫ですか、けいし」

里貴がいて、一歩進みでた。着けている制服は、警察官のに似ているが少し黒っぽい。胸には階級章があつて、それだけは見慣れた形をしている。金の葉の上に銀の葉でふちどられた旭日

章がのり、その横に縦棒が一本入っていて――。

「なんで里貴が警部補なの」

由子はずぶやいた。

おかしい。これは夢なのだ。里貴が警官の格好をしていて、警部補の階級章をつけている。夢でしかありえない。里貴は警官でも何でもない。工作機械メーカーの営業マンなのだ。

「具合が悪いのですか」

里貴がまた一步踏みだし、由子の顔をのぞきこんだ。真剣な表情で、心配そうだ。

きれいな目鼻立ちをしている。色が白くて唇だけが赤く、まるで女のようなやさしい顔だ。大学でも、女子学生にめっちゃ人気があった。

だが里貴は、自分のそういう顔を「女っぽくて嫌いだ」とよくいっていた。学生時代はまるで似合わないヒゲをのばしていた。

「頭、痛々」

由子は目を閉じ、呻いた。夢は夢でいい。だけどこの頭の痛さは何とかならないものだろうか。吐きそうだ。

「薬、もってきます」

里貴はいつて身をひるがえした。バタン、と戸の閉じる音がした。

また眠ろう。そう考え、今眠っているから夢を見ているのじゃないか、と気づいた。

目を開く。同じ景色だ。目の前に里貴がいないだけで、妙に古めかしい、小学校の校長室のような部屋はそのままだった。

机の上を見た。陶製のペン皿に万年筆と鉛筆が並んでいる。インク壘、横長の蛍光灯スタンドは、いつの時代に作られたものだろう。

デスクも木製の頑丈な造りだった。朱肉と印鑑立てが並んでいる。

いったいここはどこだ。

一番上の引きだしを開けた。細々とした品の中に、柄のついた丸い手鏡があった。昔、母が鏡台に向かっている、うしろの髪型をチェックするのに使っていたのと似ている。

手鏡をもちあげた。

自分の顔が映っている。髪型はうしろでひつつめたセミロング。顔色はあまりよくない。

喉もとを映した。左手で肌にふれた。公園で背後からくいこんだ輪の感触が、まだはつきりと残っている。

だが喉には何の跡もなかった。

あれが夢だったのか。そんなわけはない。

鏡が揺れ、首から下が映った。里貴と同じような制服を着ている。階級章があつて――。

由子は鏡をおき、上着の胸をつかんだ。

里貴と同じ色の階級章だが縦棒の数が二本多い。つまり、警視だ。

おかしい。思わずひとりで笑い、頭痛に顔をしかめた。里貴が警部補で、自分が警視。どう考えてもこれは夢でしかありえない。

部屋の中を見回した。賞状がいくつか額に飾られている。

「志麻由子警視殿」という文字が見えた。

何これ。表彰状だ。「東京市警察本部長」――。初めて見る言葉だった。

東京市警察本部。東京は「都」で、「市」ではない。各道府県に警察本部はあるが、東京都だけは、それを警視庁と呼ぶ。

扉がノックされた。水の入ったコップを手にした里貴が扉を開いた。

「警視、葉です」

コップと小さな紙包みをさしだした。

粉薬？ 今どき？ だが無言で受けとった由子は、コップの水をひと口含み、上を向いて、ほどいた紙包みの中身を落としこんだ。

猛烈に苦い。あわてて残っているコップの水を口に流しこんだ。

「このところ忙しかったから」

里貴がいった。由子の体を気づかってくれているような口調だった。

由子は無言で空のコップをさしだした。里貴は受けとり、その場で由子を見つめている。

「変なこと、いつていい？」

ようやく由子は言葉を口にした。

「どうぞ」

何と訊こう。「ここはどこ？」「わたしは誰？」それとも、「あなたは誰？」

「今日、何日だっけ」

間の抜けた質問を口にしていった。里貴は怪訝な顔をせず、答えた。

「七月十一日、土曜日です。光和二十七年の」

「こうわ？」

壁の時計が見るともなく、目に入った。九時四十分を示している。

七月十一日はあつている。土曜日だからこそ、張りこみをおこなっていたのだ。

だが「こうわ」とは何だ。

「『こうわ』の前は何？」

「承天あしたてんです。承天五十二年に戦争が終結し、元号が光和にかかりました。私は承天最後の年に生まれました」

由子は黙った。里貴の口調はあくまで真面目だった。

「他に何か、お知りになりたいことはありませんか」

「わたしは寝てたの？」

「はい。今日は土曜ですが、警視は、先日検挙した流星団グループのリーダー格である、バロン・ホシノの訊問をじきじきにおこないたいとおっしゃって、本部に午後からいらっしゃいました。私は警視の秘書官ですので、訊問にずっと同席しておりました。一時間ほど前、警視は少し疲れたので自室で休みたいとおっしゃり、『九時半に起こして』と私に命じられました」

由子は息を吐いた。流星団、バロン・ホシノ、初めて聞く。まるでマンガの登場人物のような名前だ。

それに里貴が自分の秘書官とはどういうことだ。秘書官という職名は、警視庁にはない。いや、あるかもしれないが、それは警視総監につくくらいだろう。少なくとも警視に秘書官はおおげさだ。警視は、大企業でいうなら本社の課長レベルだ。いちいち秘書などつかない。

「ここはどこなの」

ついにその問いが口をついていた。

「東京市警本部、暴力犯罪捜査局、捜査第一部、特別捜査課、課長、志麻由子警視の執務室です」

「わたしの執務室」

由子はずぶやいて、里貴を見つめた。きつとんでもなく間抜けな顔をしているだろう。口を半開きにして、馬鹿みたいな表情を浮かべているにちがいない。

だが里貴はにこりともしなかった。

そういう奴だ。真面目が洋服を着ている、学生時代からいわれていた。

「相当、具合が悪いようですね」

里貴は心配げに由子を見返した。

「訊問はどうなったの」

意味はよくわからないが、自分がしていたという仕事のことが気になって訊ねた。

「警視はみごとにバロンを追いこめました。バロンが現行政府に不満をもっていて、反政府分子の資金援助を強盗で得た稼ぎからおこなっているという自供をひきだされました。これで、バロンは強盗の罪だけでなく反国家行為幫助罪での訴追も免れられません」

由子は目を閉じ、眉根を押した。「反国家行為幫助罪」という言葉は初めて聞く。

いったいここはどこなのだ。

いや、それは聞いた。東京市警本部の志麻由子警視の部屋だ。

いたい、何が起こつたのだろう。

これが夢でないのなら、自分はまるで知らない場所にいる。知らない場所だが、自分は自分だ。つまり志麻由子。しかも職業も同じ警察官。

ただ階級がまるでちがう。

巡查部長が警視になつてゐる。殉職して二階級特進したとしても、警部どまりなのに。

殉職。その言葉を思いだしたとき、由子は息を詰めた。

日比谷公園のベンチで、自分は絞め殺された。ナイトハンターの模倣犯に襲われ、背後から首を凶器で絞めあげられたのだ。

はっと目をみひらいた。

見た。犯人の顔を。叩きつける雨をさえぎり、上下逆向きに由子の顔をのぞきこんでいた。

稲妻が光り、はつきりとその男の顔を見た。

なのに思いだせない。その瞬間に意識を失つたからだ。

「警視」

宙を見つめる由子に、里貴がいった。

「医務室にいかれますか。医務官はいませんが、当直の看護官なら——」

「大丈夫」

つぶやくように由子はいった。

「水は？ もう少し飲まれますか」

里貴は不安げに訊ねた。

こんな顔をしてわたしを見てくれるなんて、いったいいつ以来だろう。会社員になってからの里貴は、いつも疲れていて怒りっぽく、なのに由子と少しでもいっしょにしなければ、より不機嫌になった。

公務員じゃないんだよ、俺は。ため息まじりに何度いわれたろう。

結果をださなけりゃ、すぐに切られちまうんだ。そうしたら、残りの人生をずっと負け犬で生きていかなきゃならない。そんなのは、絶対に嫌だ。

学生の頃の里貴は優しかった。年下なのに、いつも兄のように由子のことをケアしてくれた。

「お願い」

「紅茶より、水がいいですか」

「あったかいコーヒーがあれば、そっちがいい」

頭痛は少しやわらいでいた。さっきは吐きそうなほど痛んでいた。

里貴が風のように身をひるがえし、部屋をでていった。

由子は机に両手をつき、立ちあがった。まるで大昔のミッションスクールの制服のような、丈の長いフレアスカートをはいている。

見たことのない制服だ。

部屋はデスクと本棚、布ばりのひとりかけのソファがあるだけだった。

警視に個室。

考え、由子は首をふった。本当の警察ならありえない。秘書官同様、個室などあてがわれるような階級ではないのだ。あるとすれば、所轄署の署長くらいだ。だが今、警視庁管内で、警視署

長は決して多くない。警視正署長が大半だ。

東京市警本部。つまり、東京市の警察本部ということで、東京都警視庁ではない。表彰状の文字を見て、さっき思ったことをもう一度考えた。

つまりここは、東京都ではない。自分は、どこかちがう世界にいる。

やはり夢なのか。こんなリアルな夢、ありえない。

制服の胸をつかんだ。死んで、あの世とやらにいるのか。あの世の警視？ その言葉に思わず笑った。あの世にまで警察があるなんて。

天国にも犯罪者がいて、それを取締っているのか。

ドアが開いた。陶製の白いカップを手にした里貴が入ってくる。

「コーヒーです。インスタントですが」

「ありがとう」

受けとった。ぬくもりが嬉しくて、両手の指をカップに巻きつけた。ミルクも砂糖も入っていないブラック。どこかなつかしいインスタントコーヒーの味は、受験勉強の夜、部屋で何杯も飲んだ記憶をよみがえらせる。

「おいしい。なつかしい味」

由子はつぶやいた。

「すわって下さる」

里貴がいい、いわれるままに腰をおろす。

「だいぶ顔色がよくなってきました。さつきはまっ白で、心配しました。働きすぎですよ」

「そうなんだ」

天井を見上げ、由子はつぶやいた。蛍光灯ではない、赤っぽい白熱球がふたつ、天井に埋め込まれている。どうりで部屋に古めかしい空気が漂っているわけだ。

「確かに、東京市の治安を預かる重責のある身としては、ご無理をなさる気持はわかります。でも、もう少しご自分をいたわっていたただかないと。警視のかわりはいないのですから」

由子はくすつと笑った。

「いったい何人いるの？」

「何がです？」

「東京市警に警視が」

「八名です」

即座に答があった。

「たった？」

「その上の警視正が四人、警視長が二人。そして市警本部長の警視監となります」

「え？　じゃあ警視総監は？」

「国警本部長です」

「こっけい？」

「国家警察本部長。隣の建物におられます」

「隣」

「市警本部と国警本部は隣接しています」

しんぼう強い口調で里貴はいった。

「わたしたちは、市警本部の職員というわけね」

「ええ。国警本部にいるのは警官じゃない、役人だ、といわれています」

「なんか、聞いたことがあるわね」

サッチョウ
警察庁の人間をそういつている上司がいた。

「警視の口癖です」

「警視って、わたし？」

「そうです」

にこりともしない里貴。

ため息をつき、由子はカップをおろした。

「あのさ」

「はい？」

「何がどうなったのか、わかんない。いきなりここにいて、わたしは警視だって。だって巡査部長だったんだよ」

「それは何年も前です。私も知らない頃ですね」

「キャリアってこと？ わたし」

「キャリア？」

「公務員I種採用」

「何ですか、それは」

「知らない？」

里貴を見た。

「はい。警視は、通常の警察官採用試験をうけられて、十年で今の階級に到達されました。もちろん十年で警視というのは、過去例にない昇進速度です」

「十年？ わたし高卒で拝命したの？」

「公務員特別養成学院のご出身です。通常は十八歳で入学されるところを飛び級で、十五歳で進学され、人より三年早く卒院されました」

「すごいじゃない」

「もちろんです。女子生徒としては初めて、男女通しても、学院史上四人目の快挙です」

「なんか夢みたい」

「私も、警視の秘書官をつとめられるのは、夢のようだと思います。毎日、毎日が、本当に勉強になっています」

「まるでちがうわ」

由子は笑いだした。本当の自分は、駄目警官だった。大卒だが準キャリアというわけでもなく、刑事になれたのも一課に配属されたのも、すべては殉職した父のおかげだ。父を知る人たちの引きで、かろうじて刑事でいられた。自分より優秀な女性警官はいっぱいいて、彼女らには目の敵にされていた。たいしてできもしないのに、父親が殉職したという理由だけでひっぱられている、運のいい女。

実際、由子には、一課に呼んでもらえるような実績などない。

それがここでは、秀才、エリート、出世頭だという。

「だけど、ここ、どこ？」

「アジア連邦、日本共和国、東京市です。住所は桜田区二丁目一番」

「わたしの知っている日本じゃない」

里貴は深々と息を吸いこんだ。

「かなりお疲れのごようすですね。官舎までお送りします」

「官舎？」

「はい。隣の新橋区にあります」

桜田区、新橋区。区名まで異なる。千代田区、港区ではない。

「官舎には誰かいるの？」

「おひとり暮らしです。ですが、下の階には、私がいいます」

「里貴も同じところに住んでいるんだ」

「はい。私は、妻と子供がいっしょですが」

衝撃をうけた。

「奥さん……」

里貴は由子の驚きには気づいていない。

「警視にもかわいがっていただいています。娘のカリンともども」

「お嬢さんなんだ」

「まだ半年足らずですが」

里貴の顔が笑みくずれ、由子は思わず、目をそらした。結婚していて、子供までいる里貴。まちがいなく、ここは由子の知っている場所じゃない。

どうしたのだろうか。里貴とは別れたのだ。その上、この里貴はあの里貴でもない。なのに、結婚して子供がいると聞いて、なぜこんなに動揺しているのか。

里貴が執務室の扉を開いた。

「お車までご案内します」

板ばりの長い廊下がつづいている。暗い。天井の明りがひとつおきに消されているからだ。

「暗く」

警視庁の廊下はこうこうと明るい。

「電力制限がとけないと、資源省の役人どもはなんでもかんでも規制すればいいと思っているんです。大利根湖の水力発電所が完成すれば、少しは電力事情も改善されるでしょうが」

扉をおさえ、里貴はいった。

「水力発電所、原発じゃなくて？」

「何ですか、ゲンパツというのは」

自分には説明なんかできっこない。由子は首をふった。

長い廊下を歩き、石の階段を降りる。建物の中は静かだった。由子の執務室が三階にあったことを初めて知った。

一階に降りたとたん、喧騒に包まれた。怒鳴り声、金切り声、古めかしくけたたましい電話のベル。黒い制服とワイシャツ姿の男たち。さらに、場所がちがってもこれだけはかわりようのな

い、いかがわしい匂いをまとった男や女、つまりは犯罪者たちが木のベンチや天井と床をつなぐ柱に手錠でとめおかれている。が、その場に由子と里貴が現われた瞬間、異変が起きた。

「警視」「志麻警視」「課長」

そうした言葉がさざなみのように広がり、制服やワイシャツ姿の警官、刑事たちが、いつせいに気をつけの姿勢をとったのだ。敬礼をする者もいる。

「答礼を」

里貴がささやき、由子はまるで操り人形のように敬礼を返した。敬礼など、制服巡査の頃以来、していない。警視庁では、上司が近くを通っても気をつけをする者などいなかった。せいぜいが、「お疲れさまでした」と声をかけるくらいだ。ここはまるで軍隊のようだ。

正面出入口おぼと思しい玄関をくぐろうとすると、

「こちらです」

里貴が呼んだ。反対側にある鉄の扉を押し開ける。黒塗りの乗用車が何十台と並んでいて、天井に赤い筒のようなランプがのっている。小さい頃見たパトrollerカーに似ている。

里貴が一台の扉を開けた。

「どうぞ」

革ばりのシートに由子は体をおいた。硬い茶のシートからは、乗りもの酔いしそうな匂いがした。車は四角く、曲線がまるでない。

「代用ガンリンはかかりが悪い上に馬力でもません」

セルモーターを何度もキュルキュルと回し、里貴はぼやいた。ようやくエンジンがかかり、黒

いパトカーは動きだした。車列を抜け、建物の出口へと向かう。

「出入路駐車厳禁」「緊急出動時以外サイレンヲ禁ズ」

手書きのポスターが柱のそこに貼られていた。

夢じゃない。これはまぎれもなく現実だ。そのポスターを見るうちに、由子は思った。こんな世界は、映画でも本でも見たことがない。夢なら、何かヒントとなる映像や文字情報とどこかで触れている筈だ。

まるで知らない世界を、ここまで鮮明に夢で見ることなどありえない。

パトカーが建物をでた。

目にとびこんだのは路面電車だ。四輻編成の路面電車が灰色の道を走っている。道幅が広い、と感じるのは、走っている自動車の数が少ないからだと感じていた。

色がない。由子の知る東京なら、ネオンやビルの標識灯の色が夜空に溢れていた。

赤い点滅、青や白、オレンジの発光が街のどこにいてもふと見あげれば、そこそこにあつた。

しかしこの東京にはない。モノトーンの街だ。灰色の路面は、雨あがりなのかじつとりと湿っている。

歩道をいく人々は黒いこうもり傘を手に、ただ前だけを見て進んでいた。

一瞬、光がさし、それが路面電車のパンタグラフが発したものだと感じていた。

「街が暗く」

由子はつぶやいた。

里貴は答えなかった。まっすぐ前を見つめ、運転に集中している。パトカーは路面電車の走る

広い通りを直進した。皇居が遠ざかる。地形はどこか、由子の知る東京と似ている。

日比谷の交差点にさしかかった。正面には銀座がある。確かにその方向だけは少し明るい。

「銀座を通る？」

「通りますか」

「つもは通らないらしい。」

「そうして」

由子はいった。この世界がどうなっているのか、自分の知る世界とどれだけちがうのか、少しでも情報が欲しい。

パトカーは数寄屋橋の交差点から銀座四丁目の交差点に向かって進んだ。

由子の知っている銀座ではなかった。並んでいるのは重厚な石造りの建物ばかりで、デパートやショッピングモールの華やかさが少しもない。唯一、銀座四丁目の角にたつビルの屋根に時計塔が立っている景色だけが共通した。

「デパートが——」

「もう閉まっています。六時閉店を義務づけられていますから」

「でもあんなに暗いの？」

銀座四丁目を右折するとき、確かに「百貨店」の文字が記された看板が外壁にあることに気づいた。

「制限時刻以降の点灯は、法令違反ですから。もちろんもぐりの営業はあとを絶たず、資源省の監視委員が摘発に回っています」

そのせいなのか、中央通りを歩く人の姿は少ない。赤っぽい街灯以外には光がなく、ときおりぼつんと点っているのは、飲食店らしい建物の入口だった。

「じゃあ、ああいうところは許可をうけているの？」

「どこです」

「今、右側にある穴倉みたいな建物。何かのお店みたいだけど」

「飲食店舗は、一組、二組に組合分けされ、交互の夜間営業が認められています。指定日以外の営業では、電灯ではなく、ロウソクを使って照明を確保するところもありますが、それによる火災が急増しています」

「電力の制限で、いつからだっけ」

由子は訊ねた。

「イスラム連合の内戦が始まった翌年からですから、もう二年になります。噂では、連合内の油田はほとんど爆破されていて、以前のように石油が生産されるようになるには、七、八年かかるそうです。アジア連邦の資源割りあて抽選に負けなければ、もう少し我が国も電力事情がよかったですでしょうが」

「犯罪は増えた？」

「もちろんです。闇は、人に罪をそそのかしますから」

由子はくすりと笑った。

「どうしました。何か変なことをいったでしょうか」

「闇は人に罪をそそのかす、だって。里貴らしくない。文学的ね」

里貴は詰まった。

「でも、警視も警視らしくありません。今夜は」

「いつものわたしは、どうなの？」

「あまり喋られません。それに——」

黙った。

「それに何？」

パトカーは新橋の高架をくぐった。山手線は、この街にもあるようだ。新橋駅の周辺はさすがに賑やかだった。ランプを点した屋台がいくつも並び、食べものや雑誌を売っている。

「私を名前で呼ばれることはありません。木之内^{きののち}、と姓で呼ばれます。あ、名前で呼ばれるのは決して嫌ではありませんので、ご心配はいりません」

木之内。確かに木之内里貴という名だった。

虎ノ門の手前でパトカーは左折した。交番があった。赤い丸灯の下に制服警官が立っていて、パトカーに敬礼をする。

そこが官舎の前だった。住居というよりはビルにしか見えない、頑丈な建物だ。正面玄関の階段の前で、里貴はパトカーを止めた。

「お部屋までごいっしょしたほうがよろしいでしょうか」

由子は息を吸いこんだ。

「そうしてくれる？」

「あの、鍵はおもちですか？ 警視はバッグをおもちにならなかったの」

「バッグ」

つぶやいた。そういえば、私物は何ひとつもたず、執務室をでてきてしまった。

「忘れたわ」

自分のバッグがどれかすら、由子にはわからなかった。

そのとき気づいた。自分はこの世界の自分じゃない。じゃあ、この世界の自分はどこにいつてしまったのだろう。

元いた世界にいった？ 入れかわった？ だが、元いた世界の自分は、たぶん死んでいる。

そう考えると不意に恐ろしさがこみあげた。知らない世界でひとりぼっちだ。景色だけではない。人も組織も、国家のありようもまるでちがう、この未知の世界に、自分は今ひとりぼっちでいる。元いた世界の自分が死んでいるのなら、もうここより他に、自分のいくところはない。

そんなのは嫌だ。帰りたい。元の世界に戻りたい。

「警視」

我にかえった。外からパトカーのドアを開けた里貴がのぞきこんでいる。

由子は無言で車を降りた。

「鍵はたぶん、管理員のところにもあると思います。借りてきます」

由子は頷いた。

玄関をくぐり、通路の正面にあるエレベータの前に立った。古い映画で見たような金属の格子を手で開いて乗るタイプだ。

「ここで待っていて下さい」

里貴がいつて通路を戻り、やがて木札のついた鍵を手に戻ってきた。

エレベータに乗り、里貴が「5」と書かれた黒い大きなボタンを押した。ガタガタと揺れながら箱が上昇する。

「今日はゆっくりおやすみになって下さい。明日は日曜で休日です」

五階でエレベータを降りると、しんと静まりかえった廊下を歩きながら、里貴がいった。

廊下の中ほど「502」と記された扉の鍵穴に鍵をさしこむ。

「もし、ご気分がすぐれないようなことがあったら、いつでも内線で私を呼びだして下さい
つこうです」

扉を押し開き、入ってすぐの壁にあるスイッチに触れて、里貴はいった。

「ごめん、内線で、どう使うの」

あきれたように里貴は由子を見つめた。

「本当に、大丈夫ですか」

「頭が痛いせいだと思う」

里貴は小さく頷き、

「じゃあ、失礼して」

と、部屋に入った。段差のない三和土^{たつき}で靴を脱ぎ、板ばりのリビングの中央におかれたテーブルの電話器を示した。番号ボタンの他に、白く丸いボタンがつきでている。

「これを押して、私の部屋番号、『405』を押して下さい。それでつながります」

由子は頷き、部屋を見回した。初めて足を踏み入れたのに、どこかなつかしい空気があった。

理由はすぐにわかった。

絵だ。額に入った小さな油絵がいくつも飾られている。その筆づかい、色のタッチ、まぎれもなく、母の絵だった。

油絵を描くのが母の趣味で、家のあちこちにも母の絵は飾られていた。母は緑が好きだ。どの絵も、緑色の絵具を基調に使用して描かれている。それはこちら側の世界でも同じだ。

「それでは、失礼します」

里貴はいつて、無言のまま部屋の中央に立つ由子を残し、でていった。

扉が閉まった。とたんに、狂おしいほどの孤独感に由子は襲われた。声をだして泣きたいたい。が、それをせず、由子は動いた。

部屋は二間だ。机やテーブル、書棚のおかれたリビングと、金属製のパイプベッドのある寝室。どちらも本で溢れている。ベッドの上には、白い木綿のパジャマが畳んでおかれていた。かたわらの鏡台には、申しわけていどの化粧品しかない。自宅で使っていた数に比べたら半分、いや三分の一もないだろう。

バスルームとトイレは腰までの高さの仕切りで隔てられ、まるで兵舎か刑務所のようなだ。

リビングのテーブルのかたわらに、布ばりの椅子があった。四角いクッションがのつている。

由子はそれに腰をおろした。小さなキッチンが見え、炊飯器と冷蔵庫がある。冷蔵庫は、古めかしい2ドアタイプだ。

両手で顔をおおった。目を閉じ、祈る。

目を開けたら、元の世界に戻ってほしい。お願いだ。これはきつと何かのまちがいだ。あ

りえないことだ。

両手をおろし、目を開いた。

かわらない、暗い部屋がそこにある。

「嘘だ、こんなの嘘だ」

思わず言葉が洩れた。もう一度両手で顔をおおった。

泣いた。泣くしか、由子にはできなかった。

4

どれくらいの間がたっただろう。由子は目を開いた。泣き疲れ、寝入っていたようだ。

息を吐き、もたれかかっていた椅子の背から体を起こした。見るともなく、部屋を見回す。

壁にかけられた額のひとつに目がとまった。

何枚もある絵の一枚だと、気にとめなかったが、それは写真だった。

モノクロの写真。人物が三人、写っている。

ぼんやりと見ているうちに、由子のはっとした。

中央はまぎれもなく自分だ。初々しい、おそらくは十代のどこか。警察官と思しい制服を身につけている。両側に立つのは、母と、そして――。

目をみひらき、壁に走りよると、額を手にとった。

父だった。

茶色のスーツにネクタイをしめた父が写っている。

母は、今の母より若い。が、髪をひつつめ、妙におばさんくさい雰囲気だ。

自分は、十八、九だろうか。

ありえない。父が死んだのは、十八のときの夏だ。

里貴は何といった？

——十八歳で入学されるところを飛び級で、十五歳で進学され、人より三年早く卒院されました

——十年で警視というのは、過去例にない昇進速度です

写真の制服が学校ではなく、警察のものなら、警官になったとき、父は生きていた、ということになる。

由子は部屋を見回した。何か、家族のことがわかる何かはないのか。

小さな机の前に立った。辞書、報告書、地図。ひきだしを開ける。

いきなり小さな拳銃と弾丸の入った箱があり、手が止まった。手入れをするための道具類もある。

拳銃は、見たことのないタイプだ。

次のひきだしには新聞や雑誌のスクラップ帳が入っていた。

「大がかりな密輸団を摘発、市警本部特捜隊。

志麻由子警視を隊長とする市警本部暴力犯罪特捜隊が、東京港を舞台に進められていた禁止薬物の密輸を摘発した」

「市内で白昼の銃撃戦、銀行強盗と。犯人二名を射殺——市警暴犯特捜隊」

「女性刑事、囂捜査で大活躍。売春組織を摘発」

頭がくらくらした。どれも志麻由子という女性警官の活躍の記事ばかりだ。

「二十六歳で異例の警視昇進へ。市警本部、志麻由子刑事」

スクラップ帳を閉じた。

気づくと全身が汗ばんでいた。部屋の中には、じつとりと湿った空気が淀んでいる。エアコン立ちあがり、窓に歩みよった。暗い街並みの向こうに光がかたまっているのは、新橋駅だろう。たて長の窓を引き上げ、空気を入れた。

ひとつだけ、はつきりした。この世界の志麻由子と自分は、まったく別の人間だ。

現実とは思えない現実を受け入れる覚悟が生まれると、由子は少し落ちつきをとり戻した。

どうしようもないことが自分の身に起こった。それがなぜ、どのようにして起こったのかは、まったくわからない。もしかすると長い長い夢を見ているのかもしれないが、この状況が夢だとはとうてい思えない。

夢ならば、自分は今、眠りの中にある。だとすれば眠りを抜けだせば、この世界から逃れられるのではないか。

部屋の中ときほどこかわらない、湿った重い空気を吸いこみながら由子は考えた。

眠りを抜けるには目を覚ますしかない。通常の夢なら、これが夢だとわかった時点で目覚めはすぐ近くにある。

が、この眠りはそうではない。つまり、夢ではないのだ。

ではどうすればいいのだ。元の世界に帰るために何をすべきなのか。

木の窓枠に手をつき、夜空に目を向けながら考えをめぐらせた。

始まった場所に戻る、というのはどうだろう。漠然と思いついた。日比谷の公園だ。あそこで張りこみ中に自分は、ナイトハンターの模倣犯に襲われ、死んだか、気を失った。そして気づくと、市警本部の執務室にいたのだ。だから、日比谷の現場に戻れば、何かが起こるのではないだろうか。

そう思うと、矢も盾もたまらなくなった。部屋の扉に向かいかけ、制服姿のままであったことに気づいた。

せめて着替えていくべきだ。軍服のようなこの格好で、人通りの少ない街をうろついたら、目立ってしまう。

本当の自分の部屋よりはるかに殺風景な寝室に入った。備えつけの洋服ダンスがあつて観音開きの扉がついている。それを開いた。

今着ているのと同じ制服が二着と、いかにも重くて頑丈そうな革のコートがぶらさがっている。私服といえるようなものは数えるほどしかない。その中から由子は木綿のパンツとごわごわとしたシャツを選んだ。パンツはグレイで、とうていお洒落とはいえない、頑丈そのものの作業着のような作りで、シャツも着心地が決しているとはいえない代物だ。この世界の自分には、お洒落をしたいという欲望はなかったのだろうか、といぶかしくなる。

なかったのだろう。きつと仕事ひと筋で、他のことには目もくれないタイプだったにちがいな

い。だからこそ数々の功績を打ちたて、異例の昇進をとげたのだ。自分とはほど遠い。

着替えた由子は里貴が借りてきた鍵を手へ外へでた。エレベータを使って一階に下りる。

外に立ったとき、自分が鍵の他は何ひとつもたずに出てきたことに気づいた。お金も身分証もない。が、それが部屋のどこにあるのかすら知らないのだ。

地名こそ異なるが、地形は、この東京市と由子の知る東京にさほどのちがいはないようだ。とすれば、虎ノ門に近いこの官舎から、現場となった日比谷公園まで歩いてみさほどの距離ではない。

交番のかたわらを歩きすぎたとき、立ち番の巡査がちらりと目を向けたような気がした。が、由子は知らぬふりをして歩きつづけた。

五分ほどで、東京都でいうところの日比谷通りにつきあたった。この道に沿って歩いていけば、やがて左手に公園が見えてくる筈だ。

習性で、左の首に目をやった。はっとした。見覚えのある腕時計の文字盤が、午前零時に近い時刻を示している。だが、それは由子の腕時計ではない。

思わず立ち止まった。あたりはまっ暗なビル街だ。東京都のような高層ビルではなく、がっしりとした重厚な石造りの建物が並び、どの窓も明りは消えている。階段に非常灯もついていないらしい。

この腕時計は父のものだ。確かめるべく、街灯の赤っぽい光の下に立った。

まちがいない。白い文字盤に入っているアルファベットは、それでしか見たことのないスイスのメーカー名を示している。珍しいメーカーで、高級というわけではないが日本に輸入されてい

る数は限られている、という話だった。この腕時計を、父は、母の兄から贈られたのだ。母の兄、由子にとっての伯父は、外務省の下級官僚でヨーロッパ駐在が長かった。

父はこの腕時計をひどく気に入り、愛用していた。荒川で発見された遺体の左腕にもこの時計がはまっていた。

形見として母がもっている。

その腕時計を、今、自分がしている。ということはつまり、この世界でも、父はもう亡くなっているのだろうか。

今はそんなことを考えているときではない。由子は首をふった。

日比谷公園まではあと少しだ。そこにいけば、現実の世界に戻れるかもしれないのだ。

車も、人も、まったく通らない日比谷通りを由子は歩きつづけた。

内幸町の交差点を越え、日比谷公園の入口に到着した。ようやく一台の車が、湿った路面をかむタイヤの響きをたてて由子の背後を通過していった。

公園は暗かった。

街灯の数も少なく、その光も弱い。足を踏み入れようとして、暗闇に恐怖を感じた。

あいつがいるかもしれない。由子の足はすくんだ。

部屋にあった拳銃をもってくればよかった、と後悔する。

だが今さらとりに戻るのも億劫だった。それに何より、現場のベンチは、ここから少しのところにある。

公園の中に足を踏み入れた。人の姿はまったくないだろう、と想像していたが、二十メートル

ほど進んだところで、自分の考えがまちがっていたことに気づいた。

カップルがいる。それもひと組ふた組ではない。

赤く弱々しい光の下のベンチには、それこそベンチの数だけといってよいくらいのカップルがいて、身を寄せあっていた。

由子は息を吐いた。なぜこんなにカップルだらけなのだろう。

そして気がついた。この街は、由子の知る東京より、はるかにカップルのいられる場所に乏しいのだ。電力制限のせいで、営業する飲食店も限られていて、気楽に身を寄せあえるようなカフェや居酒屋の数が少ない。となれば、自然にこうした公園のようなところで寄り添うことになる。他にも同じようなカップルがいれば、心強くもあるだろう。

そういえば、二、三十年前まで日比谷公園はカップルのメッカだったとベテランの刑事がいつていたのを聞いた気がする。

まさにその状況にあるようだ。

ほっとすると同時に、別の不安がこみあげ、由子は足を早めた。公園をよこぎって、奥へと進む。

不安は適中した。由子が襲われたベンチにも、カップルがすわっていたのだ。男はジーンズに薄いシャツを着け、女は膝丈のワンピース姿で、ぴったりと体をくつつけあっている。女の下半身に、男物らしい上着がかけられ、その内側に男の手が入っていた。

由子は思わず目をそらした。同時に強い失望に足がなえるのを感じた。ここにくれば何かが起こると考えたのは、ただの願望でしかなかった。

あたりを見渡した。公園の雰囲気は、街灯の光を除けば、由子の知る東京と似通っている。街のたたずまいの差に比べれば、むしろそっくりと行ってよい。

ここには、ナイトハンターは現われないだろう。あまりにカップルが多い。

いや、そうともいい切れない。ナイトハンターもその模倣犯も、人通りのある場所で犯行に及んでいる。

とはいえ、ここにいる理由を由子は失っていた。あのカップルが立ち去るのを待ってベンチに腰をおろしても、とうてい何かが起きる、とは思えない。

何もかもが知っている東京と異なるこの街で、奇妙なようだが、カップルが集まった公園だけが、ひどく日常的でありふれた光景に由子には思えていた。つまりここでこそ、何も起こりやうがない、という気がしていたのだ。

それでもししばらくたたずみ、ベンチのカップルから奇異の視線を向けられるようになってようやく、由子は踵かかとを返した。

この先どうすればよいのが、またわからなくなった。

何をすれば元の世界に戻れるのか。再び不安と恐怖がこみあげ、泣きだしそうになる。

気づくと公園を抜けでていた。そのまま、あてどもなく由子は歩いた。もはや街の景色のちがいを、どうでもよかった。どのみちここから自分は抜けだせない。とすれば、嫌でも見慣れることになる。

どうしたって合理的な説明など不可能だ。誰に話そうと理解される筈もなく、主張しつづければ、いずれは医師のもとに連れていかれる羽目になるだろう。働きすぎで心を壊したと思われる

のが関の山だ。

いや、実際にそうなのではないか。こここそが正しい場所で、ただ妄想にとらわれているだけではないのか。

ちがう、断じてちがう。

半泣きになり、由子は歩きつづけた。人や車の多い場所にでも、歩みを止めることはなかった。人目を惹いたかもしれないが、誰からも呼び止められることはなく、救いの手など、どこからもさしのべられない。

角を曲がれば、いつもの東京に戻っているのではないか。官舎で、顔を両手でおおったときと同じように思い、少しでも明るい交差点が前方にあると足を早めた。

が、いく度くり返しても同じだった。どこか陰うつでモノトーンの東京しか由子の目前にはなかった。

歩いて歩いて、歩き疲れ、もうこれ以上は無理だと思い、由子は立ち止まった。

そこは官舎のある虎ノ門の近くだった。歩き回っているうちに戻ってきてしまったようだ。

交番のかたわらを、足をひきずるように歩き過ぎた。

建物が見えた。その玄関に、男がひとり立っていた。

里貴だった。カーデイガンにジーンズをはいている。その眉根には心配げな皺が寄っていた。

「里貴……」

顔を見た瞬間、由子は全身から力がぬけるのを感じた。倒れこむように崩れる由子を、駆けよった里貴が支えた。

「信じられる？　信じられないわよね」

しわがれた声で由子はいった。五階の、由子の部屋だった。抱えられるようにして部屋に連れてこられた由子は、里貴にすべてを話した。

里貴は市警本部から由子を送ったあとも心配をしていたらしい。そして部屋に電話を入れ、返事がないのを不安に思っただけから窓の明りを確かめようとして、交番の巡査からかけるのを見た報告をうけたのだ。それからずっと、帰りを待っていたのだという。

「——つまり、警視が、警視ではない、というお話ですか」

「そう」

ベッドに横たわったまま由子はいった。

「ここにいた志麻由子と、この志麻由子は別人なの。あなたの知っている志麻由子は、わたしより優秀で強い警察官。向こうの世界では、わたしは巡査部長でしかなく、それもやっと刑事になれたようなみそっかすだった」

里貴は無言だった。

「わたしは外へでたのは、日比谷公園の、襲われた現場にいくため。そこへいけば、もしかしたら元の世界に戻れるかもしれないと思った。でも、駄目だった。公園のベンチは、カップルばかりで、まるでわたしは不審者だった」